



Data	2022-144
監督・脚本:	ジェームズ・キャメロン
出演:	サム・ワーシントン/ゾーイ・サルダナ/シガーニー・ウィーバー/スティーヴン・ラング/ケイト・ウィンスレット/クリフ・カーティス/ジェイミー・フラッターズ/ブリテン・ダルトン/トリニティ・ジョリー・プリンス/ベイルー・パス/フィリップ・ゲリオ

みどころ

銀行の金利を0%もしくはマイナスに！日銀による、そんな“異次元の金融緩和政策”には驚かされたが、岸田文雄総理が、年明け早々唱える“異次元の少子化対策”って一体ナニ？これは、単なる言葉遊び・・・？

『タイタニック』（97年）もすごかったが、『アバター』（09年）に見る壮大な世界観と映像美は圧倒的。まさに“異次元の表現”だった。それから13年、待望の第2作が公開され、大ヒットが約束されているが、予定どおり第5作までシリーズは続くの？

軍事力、経済力のみならず映画（興行）力においても、今や、中国は米国に追いつき、追い越せの勢いを示しているからシリーズ完結には一抹の不安もある。ちなみに、日本は、五味川純平の原作を山本薩夫監督が映画化した『戦争と人間』（70年、71年、73年）が計3作で挫折してしまった経験を有している。さて、『アバター』の第3作、第4作、第5作は・・・？

■□ ジェームズ・キャメロン監督が13年ぶりに第2作目を■□

長い間、世界の歴代興行収入トップの座にっていた監督がジェームズ・キャメロン監督なら、それを塗り替えたのも同じジェームズ・キャメロン監督。すなわち、彼が監督した『タイタニック』（97年）は全世界の興行収入が10億ドルを超えた最初の映画で22億ドル（約2,940億円）。そして、その記録を塗り替えたのが、同じくジェームズ・キャメロン監督の『アバター』（09年）（『シネマ24』10頁）の29億ドル（約3,880億円）だ。

同作の評論の「みどころ」の中で私は、「①壮大な世界観、②ストーリーのオリジナル性、③造形と色彩の美しさが本作の特徴だが、底流を流れる思想は人間の強欲さ？」と書いた。

また、その本文は、①3Dは魅力も倍だが、疲れも倍？②CO₂の5%削減は？西暦2154年の地球は？③本作のテーマは？ある任務とは？④私にはやっぱり、ジャックとローズの方が⑤ジェイクとネイティリの出会いは？⑥『もののけ姫』との共通点を感じたのは私だけ？⑦圧倒的な軍事力の勝ち？過去の歴史は？⑧部族連合、動物連合の反撃は？⑨『アバター』をめぐる米中抗争は？という9つの「小見出し」に分けて書いた。

そんなジェームズ・キャメロン監督が13年ぶりに発表した『アバター』シリーズの第2作目たる本作も、そのポイントは多くの点で共通している。本作は冒頭、登場人物たちの現況や本作のテーマを明示するべく、前作のあらすじめいたストーリーが紹介される。そして今、ジェイク（サム・ワーシントン）は、惑星パンドラの種族である森の民ナヴィの長として、妻となったネイティリ（ゾーイ・サルダナ）の他、①今は亡きグレース・オーガスティンのアバターから生まれた養女のキリ（シガーニー・ウィーバー）、②長男のネテヤム（ジェイミー・フラッターズ）、③次男のロアク（ブリテン・ダルトン）、④8歳の末っ子の娘トゥク（トリニティ・ジョリー・プリス）、そして⑤幼かったためパンドラに取り残された地球人（クオリッチ大佐）の子どもながら、ジェイク家の養子となったスパイダー（ジャック・チャンピオン）たちと共に、幸せに暮らしていた。ジェイクが今子供たちに教えているのは、“家族団結の大切さ”だ。しかし、そこにマイルズ・クオリッチ大佐（スティーン・ラング）が、ジェイクの命を狙って再び登場してくると・・・。

■□■全5部作に共通する基礎知識をしっかりと■□■

私が中学生の時代にテレビで大ヒットしていたSFドラマが、原題『スタートレック』、邦題『宇宙大作戦』だった。その主人公は、惑星連邦宇宙艦隊に所属するコンスティューション級宇宙艦U.S.S エンタープライズNCC-1701の3代目の船長であるカーク。そのストーリーは多岐にわたっていた。

同作でもさまざまな前提事実があった。その代表が「ワープすること」だったが、これはナニ？同作を理解し楽しむためには、ワープをはじめとするさまざまな基礎知識、さまざまな概念を基礎知識として習得する必要がある。『ロッキー』シリーズでは、そんな基礎知識を習得する必要はなかったが、壮大な世界観で世界中を魅了した『スター・ウォーズ』シリーズでも、それは同じだった。

第1作の『アバター』で壮大な宇宙観、世界観を創りあげたジェームズ・キャメロン監督は、『アバター』シリーズ全5作を作るそうだが、そのストーリーを理解するために最低限習得することが必要な基礎知識は次の諸点だ。すなわち、

- ①惑星パンドラとは？（アルファ・ケンタウリ系惑星ポリフェマス最大の衛星のこと）
- ②希少鉱物アンオブタニウムの採掘とは？（パンドラに存在する超伝導物質で、地球のエネルギー問題の解決の鍵となる希少鉱物のこと）
- ③RDA社（資源開発公社）とは？（未来版の営利主義の植民地開拓会社の設定で、劇の中心的モチーフである侵略者対ネイティブの「侵略者」になる）

④先住民ナヴィとは？（パンドラに住む生物の中では最も知能の発達した種族の一つである巨人型有尾人種のこと）

⑤アバターとは？アバター計画とは？（地球人とナヴィの DNA を掛け合わせた腎臓生命体に、操作員の意識を神経で接続させたもの）

■□■ジェイクとクオリッチ大佐との因縁は？■□■

『ロッキー』シリーズでは、ロッキーの対戦相手を変えて、それぞれのクライマックスを作りあげていた。しかし、『アバター』シリーズにおける、ジェイクはもともと海兵隊員で、アバター計画の責任者であるクライス博士の下で、操作員（ハンター）としての任務を果たすべき立場の男だった。ところが、ハンターとしての修業を積み、ナヴィとしての生き方を学ぶ中で、ジェイクは彼らの兄弟として認められるようになったうえ、戦士ネティリとの間に愛情が芽生え、更に“空の王者”の異名を持つ巨大な翼竜トゥルータの乗り手となり、ついにはナヴィの指導者になることに。

他方、アバター計画実現のため地道にナヴィとの交渉を進めようとするグレイス博士と、アバター計画が具体的に進展しないことに苛立つ RDA 社の責任者パーカーが対立する中、傭兵部隊の隊長であるクオリッチ大佐は、「交渉がうまくいかないなら、強行手段もやむなし」、とパーカーを焚きつけた結果、ナヴィの村には焼夷弾とミサイルの雨が打ち込まれることになった。さらに第 1 作で、ジェイクはナヴィのリーダーとしてクオリッチ大佐の部隊と戦って勝利したし、クオリッチ大佐も息絶えたはずだったが、第 2 作では再びその 2 人の因縁が復活することに・・・。

■□■侵略にはトコトン抵抗！それとも逃走？■□■

本作は、導入部ですぐにジェイクとクオリッチ大佐との因縁（の再発）が明らかにされるから、クオリッチ大佐の侵略行為とそれに対するジェイクの抵抗の構図が明白になる。しかし、その舞台（戦場）はパンドラだから、ナヴィの生活が破壊されるのは必至。しかも、圧倒的な戦力を誇るクオリッチ大佐に対して、ジェイクたちができるのは抵抗戦、ゲリラ戦だけだから、長期戦になるのも必至。それは、1960年代後半に始まったベトナム戦争の姿を思い起こせばすぐにわかるはずだ。しかして、ナヴィのゲリラ戦を指揮するジェイクの奮闘は？それを支える元女戦士だったツーテイの奮闘は？

ベトナム戦争は結局、北ベトナム人民の団結の力によって、圧倒的な戦力を誇るアメリカ軍を駆逐した。それと同じように、そしてまた、近時観た中国映画『1950 鋼の第7中隊』（21年）（『シネマ51』18頁）と同じように、本作でも、あの戦闘、この戦闘が次々と描かれ、最終的にはジェイク率いるナヴィの抵抗軍がクオリッチ大佐率いる侵略軍を撃退！そんなストーリー、そんな戦争映画の展開だと思っていたが、アレレ、アレレ・・・？そこで見せたジェイクの決断とは？？

それは、トコトン抵抗ではなく逃走。すなわち、クオリッチ大佐からナヴィが狙われる

のは、クオリッチ大佐の宿敵である自分がナヴィのリーダーとして存在しているため、したがって、自分が身を引き、どこかに逃亡してしまえば、ナヴィが狙われることはない。そう考えたジェイクが自分たち家族だけがナヴィの村から逃走すると決めたところから、本作後半以降のストーリー展開は180度転換していくことになるので、本作ではそれに注目！

もちろん、それは苦渋の決断。ジェイク一家は一体どこへ行くの？パンドラの惑星の中に、一家を受け入れてくれる部族はあるの？クオリッチ大佐はどこまでも追跡してジェイクの命を狙うのでは？そんな予想でいっぱいだが、さあ、ジェイクとその家族たちは一体どこへ？

■□■人類はパンドラで何を？クオリッチ大佐の復活は？■□■

本作の主人公は、元海兵隊員でありながら、すっかり山の民のリーダーになりきっていたジェイクだが、本作導入部で描かれるジェイクの生活ぶりとは好対照に、人類はパンドラへの再侵攻を狙っていた。そのため、人類はパンドラでブリッジヘッドシティという名前の新しい主要な作戦基地を建設していたから大変だ。1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランド侵攻も、2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻も、ある日突然始まったが、人類によるパンドラへの侵攻は一体いつ？

さらに大変なことは、第1作で死亡したはずのクオリッチ大佐がその中で目を覚ましたこと。しかも、生まれ変わったクオリッチ大佐の姿はナヴィそのものだったからビックリ！何と人類は、リコピナントというナヴィと人類の混血のアバターを生み出し、そこに生前の人格のバックアップを植え付けていたわけだ。そんなクオリッチ大佐の復活は本作でいかなる意味を持つの？そして、彼は本作でどんな活躍を？

さらに、本作のラストに向けては当然ジェイクとクオリッチ大佐の対決がクライマックスを迎えるが、そこでは、実はクオリッチ大佐の息子でありながらジェイクの養子になっているスパイダーの板挟みの立場が急浮上してくる。その確執については、スパイダー自身が最も強く感じていたのは当然だが、一見非情に見えるクオリッチ大佐のわが子を思う気持ちは如何に？本作では、そんなスパイダーを含めた、ラストに向けてのジェイクとクオリッチ大佐との対決に注目！

■□■森の民から海の民へ！子供世代の対立と交流、和解は？■□■

第90回アカデミー賞で作品賞、監督賞、美術賞、作曲賞の4部門を受賞したギレルモ・デル・トロ監督の『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）『シネマ41』（10頁）は、タイトルだけではなんの映画かわからなかった。それと同じように、『ウェイ・オブ・ウォーター』と題された本作も、そのタイトルだけでは何の映画かさっぱりわからなかったし、映画が始まってなぜそんなタイトルになっているのかわからなかった。

しかし、森の民の拠点から脱出したジェイクたち家族がマウンテン・バンシーに乗ってたどり着いたところは、何と海の民メトカイナ族が住んでいる諸島だった。そこで発生する問題は、第1に海の民のリーダーであるトノワリ（クリフ・カーティス）がクオリッチ大佐から追われている、いわば全国指名手配犯たるジェイクたち家族たちを受け入れてくれるのか、ということ、そして第2は、もし受け入れてくれたとしても、森の民だったジェイクたちが正反対の海の民として海の中での生活に切り替えることができるのかということだ。もっとも、そこまで論点整理ができれば、その後の展開は予想通り、ひたすら低姿勢で「問題を起こさず、海の民としての生活に溶け込め」と子供たちに教えこむジェイクに対して、子供たちは時に従い、時に反発しながら、次第に海の民になっていくことに。

2023年に入った途端に、岸田政権が打ち出した「異次元の少子化対策」が話題となり、小池百合子都知事もそれに対抗すべく（?）、新たな提案を打ち出している。今や日本で1年間に生まれる新生児の数は100万人を切っているが、ジェイクには、ネテヤム、ロアク、トゥクという3人の実子の他に、養女のキリと養子のスパイダーもいた。他方、トノワリとその妻ロナル（ケイト・ウィンズレット）にも、ツィレア（ベイリー・パス）とアオユング（フィリップ・ゲリオ）という2人の子供がいたから、本作の中盤では、ジェイクやその家族たちが森の民から海の民に溶け込んでいく中、これらの子供世代の対立と交流そして和解の姿にじっくり注目したい。

■□■クリーチャー・デザイン比較。トルークVSトゥルクン■□■

クリーチャー・デザインの面白さとしては、ポン・ジュノ監督の韓国映画『グেমルー 漢江の怪物』（06年）（『シネマ11』220頁）が出色だったが、『アバター』シリーズ第1作で見たトルーク（翼竜）もカッコ良かった。しかし、空を飛ぶトルークに対抗して、第2作で登場する、海に潜るトゥルクンは如何に？

本作中盤のジェイク家族が海の民としてトノワリたちに親しんでいくストーリーはやけに長い。それは、海の中に長く潜るための呼吸法や水泳法、そしてトゥルクンを乗りこなす術等を如何に習得していくかの物語に加えて、巨大クジラも登場してくるからだ。ある日、次男のロアクが銚子を打ち込まれているクジラと遭遇。そこから始まる新たな海の物語とクジラたちの生態にも注目！

■□■絶賛！絶賛！また絶賛だが、ホントの評価は？■□■

私が尊敬しているごく少数の“ホンモノの映画評論家”は、マスコミの論調におもねることなく、各作品について自分の意見を正直に表明している。しかし、いわゆる“ライター”と呼ばれる人々は、誉める記事を書くために雇われているようなものだから、本作のような大人気作品については、絶賛、絶賛、また絶賛！それはそれで仕方ないし、私も本作の素晴らしさは認めるものの、ホントにそれでいいの？

舞台が海となった本作に続く、シリーズ第3作の舞台は、ジェームズ・キャメロン監督が、「世界観やキャラクター、クリーチャー、海や砂漠、山、北極のような極地まで準備して取り組んでいて、今後の準備は特に必要がない」と語っているため、砂漠になるのではないかという予測が流れている。しかし、コロナ問題、ウクライナ問題等々を含め、一寸先もわからない今のご時世では、たとえ『アバター』といえども、そのシリーズ化の可否や成否についての保証はないと言うべきだ。予定どおり第5作までシリーズが続くかどうかを含めて、そのことをしっかり考えたい。

『戦争と人間』は計3作で終わったことによって、逆に“まだ見ぬ楽しみ”という思わぬ副産物を得たが、『ロッキー』シリーズや『ランボー』シリーズ等々は、シリーズを完結することによって燃え尽き感でいっぱいになってしまった感もある。したがって、本作を含めて『アバター』シリーズ全体の評価が決するのは、シリーズすべてが完結した時点、そう考えるのが正しいのではないだろうか。そうすると、絶賛、絶賛、また絶賛は少し早すぎるのでは・・・。

2023（令和5）年1月16日記